

創業60年記念

わたくしが読んだ童心社の本

命を抱く

嬉しさを

描いた絵本



長野ヒデ子・作

こだま ひろみ／J.P.C（一般財団出版文化産業振興財団）読書アドバイザー、公立図書館非常勤司書、鎌倉女子短期大学・新渡戸学園短期大学非常勤講師。著書に『0～5歳 子どもを育てる「読み聞かせ」実践ガイド』（小学館）。

児玉ひろ美

最近は貸し出しも返却も自動化が多くなりました
が、同書にとって図書館のカウンターは、良くも悪くも、子どもの反応が直接感じられる場所です。
子どもたちからは、やまあまなことを直球で教えられました。そのなかのひとつに、〈子どもは自分が生まれてきたときの話を、聞くのも話すのも大好き〉ことがあります。

子どもたちは赤ちゃんが主人公の絵本を繰り返し借りては、「ねえ、赤ちゃんのとき、わたしかわいいかった?」「なんでぼくの名前、○○○にしたの?」と、家族に問い合わせる。「児玉さん知ってる? わたしね……」と、この家族から

聞いたエピソードを、まるで見てきたように話してくれます。きっと無意識のうちに、自分がどんなに待ち望まれ、愛されてきたのかを確認し、そしてそのことを自分がどんなに嬉しく喜びしく思っているのかを、誰かに伝えたいのでしょう。それは国籍や文化に関係ない、子どもの本能なのかもしれません。

子どもたちが赤ちゃんの絵本を借りる傾向は、国内外を問わず見られるようです。

一方、自分の生まれた時の話を嬉しそうに尋ねる子どもに心えるお母さんの表情は、本当に優しく、かつ自信に満ちて綺麗、というより、カッコいい！普段のお母さんとは別の顔が垣間見え、親子ほどの年齢差でも、同じ女性として、同志のような気持ちになります。そう、出産はそれぞれにドラマやエピソードがあり、大変な思いをしたもの、それを乗り越え、みんなお母さんになつたのです。初めての

子どもが生まれた時、それは、お母さんがお母さんになつた時。お母さんの誕生日でもあるのです。長野ヒデ子さんは出産をそんなふうにとひらべ、「おかあさんがおかあさんになつた日」を描かれたのでしょう。

予定日を過ぎて入院し、なかなか生まれない赤ちゃんを待ち望み過すお母さんの一日を描いたこの絵本は、最後に出産の無事をこんな言葉で喜びます。

わたしのあかちゃん、ありがと。

あなたの つまれた日。

おかあさんが おかあさんになつた日。

命を抱く嬉しさと喜びに満ちた暖かい絵と言じて、涙ぐむ大人も少なくありません。ところが、子どもたちは、「赤ちゃん、偉かつたねえ」と、少し上から目線（？）の一言。生まれた側の当事者感覚ってこんなふうなのかもしませんね。

では、お父さんは、いつたいひとつお父さんになつたのでしょうか。そう思った方は、『おとうさんがおとうさんになつた日』も、どうぞこの家族でお読みください。きっと、お父さんが照れながら嬉しそうな顔をなさないじやしきょう。ある若いお父さんは「そつだつたんですね。読むまで忘れていましたけど」と、鼻を赤くして仰っていました。

そうそう、今ではおばあちゃんとしての嬉しさも体験済みの長野さんは、『おばあちゃんがおばあちゃんになつた日』も描いていらっしゃいます。